

2014年11月

No.440

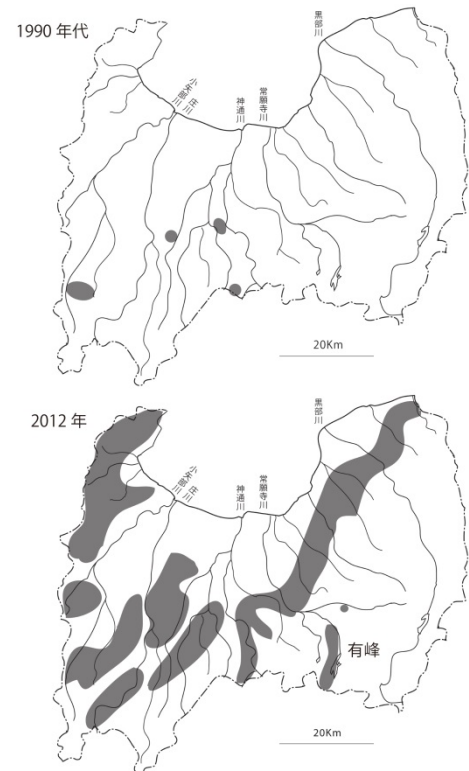
イノシシがふえた！

イノシシは明治時代には富山県に生息していましたが、その後長い間生息していませんでした。しかし、1990年代から富山県の隣の石川県、岐阜県から、2000年代の中頃から新潟県から入り、現在では、県内の里山から山地に広く分布するようになりました（図、写真）。標高1200m程の有峰でもイノシシが土を掘り返してエサを探した穴があちこちでみられ、立山黒部アルペンルート沿いでもみられるようになっていています。イノシシは再び50種ほどいる富山のほ乳類の一員になったといえます。

田畑の被害も多くあり、山すそや山あいの集落では、水田をころげまわったり、稲穂を食べたり（写真）、サツマイモなどの畑の作物を食べたりしています。イノシシの進入を防ぐため、多くの地域で水田や畑のまわりに電気柵（イノシシの体がふれると電気が流れる）が張りめぐらしてあります。

里山では集落の人口が減り、周辺の田畑は放置されているところが多くなり、そこには草がはえイノシシが生活しやすくなっています。また、1987年冬以降は里山の積雪が少なくなり、冬もイノシシがすみやすくなっています。メスは4頭ほどの子を産み、産まれて1、2年でメスは子を産むことができます。このようなことがイノシシが増えた原因だと思われまます。ニホンジカも増えつつあり、野生動物とのつきあいかたを考える時代になってきています。

(南部久男)



イノシシの分布の変化。南部(2002)と富山県動物生態研究会(2013)より作図。



林道にでてきたイノシシの親子(上)と水田に進入したイノシシ(下)